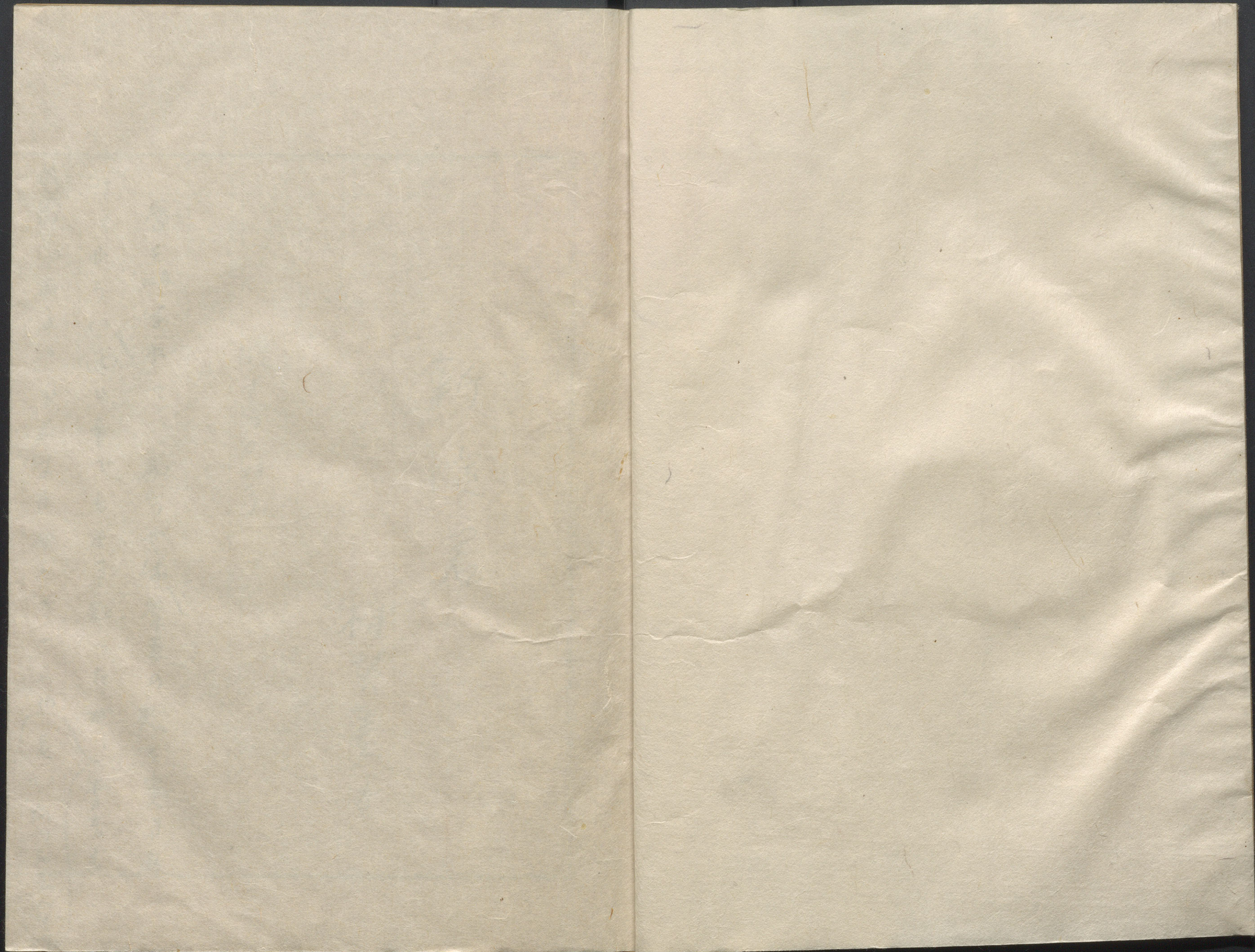






新
定
君

林
葉
美
子

暖
ま
る
の
時
間

唇をみ
はれて、おち
やは^下秀吉の
頬と突きあ

げ
る
や
ろ
に
西
の
手
で
も
が
手
狂
つ
た
か
、
手
が
吉
し

武
將
で
あ
る
。か
よ
は
き
や
す
の
一
人
也
老
い
た
り
を
云
へ
ん

三つはいい。燭を消して
 香りは、あゝ、そのやうな可^しがた
 おちやの柔い手を握つた。燭の灯を消す
 消した。闇が深^く。おちやは急にわつと声
 をあげて香を
 四圍一面の隙につゝ伏して泣
 いた。
 香は、いゝ一度、ふみとふいて、午さいり
 で、おちやの髪を抱かゝえたが、おちやは
 その手を強く握^りつけた。
 貴方は、おちやを苦しめるが、
 貴方は、おちやの……。香は解せない。操が、
 つたが、えゝなせん。さくはいでよい。闇
 のちか^に、身を投げ出して泣いてみる。おちやの柔
 い手が、はあゝと香のハートに明くる。寂
 しい。あゝ。赤裸なる小兒のやうな哀しさで。
 香は、老いの絶望を知つた。おちやのあで
 は、何れ彼れが受動的な悦みに落ちる。おち
 受動的な悦みに。最善を望してみせよ。おち

林 芙 美 子

貴方は、おちやの……。香は解せない。操が、
 つたが、えゝなせん。さくはいでよい。闇
 のちか^に、身を投げ出して泣いてみる。おちやの柔
 い手が、はあゝと香のハートに明くる。寂
 しい。あゝ。赤裸なる小兒のやうな哀しさで。
 香は、老いの絶望を知つた。おちやのあで
 は、何れ彼れが受動的な悦みに落ちる。おち
 受動的な悦みに。最善を望してみせよ。おち

人間的な染っ120い感謝が、
僕をこつぱみじん碑にきた。
泣かぬでいい……。ちやちや、泣くるは
ない。それより、
僕等の鼻でいっふんで笑ふ
つくりやれ……
僕はあちやの柔い腹を抱きあぐて、
顔をあちやの胸に押しあぐた。
無限にこの
胸が流ればよいと思へた。
ふつとおどろく
のふんがあるあしかがほい、
遠い日のまの
人といふさかちで現実を握りか、
ええぬ

林美美子

やうなふかい。
まだ気がなほぬかの？
僕は小さい声でうた。
運命の障子を通かして、
廊下の隅に火が仄々
明る。あちやは、
僕の膝かゝる腹を
いつ、髪を肩の
後にかきあぐた。
誰か、
火をいぼく
りやれ……
あちやは、
人間が希望を
感じぬの
一つの真
理を
この世に
よつて
おほい
す水を
ふかい。

[illegible]

し　　く　　~~水~~　　ぬ　　か　　？　　近　　い　　う　　て　　、　　あ　　ち　　か　　の　　城　　
 を　　築　　ま　　す　　、　　そ　　こ　　に　　、　　青　　杏　　は　　ち　　か　　の　　二　　人　　の　　墓　　を　　こ　　そ　　
 探　　ち　　ま　　い　　の　　ち　　か　　。　　青　　杏　　に　　こ　　ろ　　を　　。　　他　　に　　何　　の　　か　　
 け　　か　　へ　　り　　な　　い　　の　　は　　ち　　か　　~~ちか~~　　へ　　よ　　う　　帰　　る　　。　　墓　　を　　あ　　ら　　わ　　い　　
 れ　　性　　に　　老　　若　　は　　な　　い　　。　　――　　ち　　か　　~~ちか~~　　青　　杏　　は　　厭　　か　　？　　
 ち　　か　　は　　力　　な　　く　　首　　を　　ふ　　つ　　た　　。　　青　　杏　　は　　あ　　ち　　か　　の　　
 肥　　を　　軽　　う　　と　　か　　、　　え　　て　　、　　足　　の　　蔭　　の　　ふ　　し　　を　　い　　ん　　。　　
 お　　ち　　か　　の　　肥　　を　　撫　　む　　へ　　る　　。　　ふ　　し　　を　　い　　ん　　は　　き　　や　　う　　の　　
 向　　ひ　　か　　こ　　い　　て　　お　　も　　む　　。　　
 青　　杏　　は　　、　　ど　　ん　　な　　と　　こ　　ろ　　に　　い　　る　　。　　か　　や　　は　　つ　　に　　ち

かつた、河野、堀尾、高木、
 言上した。
 二人の使者は、三女の常在の由に、太刀、
 馬鞍などを賜はり、一々、晴天、つた。
 信長、鷹の狩、~~お供~~し、鶴、雁、な、と、うへ
 へ、
 二、人の満足、一、おる、若、ふ、つた。
 秀吉は、於、美、ね、の、根、性、し、根、性、を、か、子、供、の
 女、ん、を、娶、つ、わ、か、う、を、も、し、あ、か、つ、た、永、永、の
 根、性、を、底、深、い、の、に、愛、い、た。

永永より、

林 美 美 子

江戸書局

天正十三年の四月二十四日。
 秀吉は、弟の秀長を、一、四國退治の大將
 として出陣させた。秀長は四十歳で、若者を
 木下、小市、郎、と、つた。
 秀吉は、福、良、を、へ、て、四國へ、六、萬、餘、の、兵、を、秀、吉、は
 送、つ、た。
 秀吉は、其、の、頃、信、長、公、を、あ、う、て、お
 り、の、~~海~~考、へ、の、あ、う、た。
 の、導、導、を、一、て、戦、場、の、型、式、を、色、々、考、へ、て、お、ん。
 ま、つ、オ、ラ、ン、ダ、船、の、型、を、あ、く、似、て、秀、吉、は、大

隠

茶を啜し。

終
の
淡々
々々
一
を
平
凡
な
夢
の
ち
か
で
天
と

の
は
こ
し
に

あ
な
の
た
い
し
う
き
ふ
く
り
て

四非の罪をたてしる。その四非は何にあり
、その四非がいの水はいの深く精神にすゝきこんで
あふかゝるわが心、~~あふ~~明らかにするを
には、神佛のあがりの啓示が必要なら、お
ちかはそんなる中を空想しな。神佛をうたしの
、海をいつかりと自分が見る中をうたつ
た水はいれ。何かしる、この人達のうたの
、おのゝ心、何事かの天の報ひがらにうたはな
いと、心の奥に思ひをうた。
あちかは、あつちをうた。あつちをうた。
あちかは、あつちをうた。あつちをうた。

林 芙 美 子

物思ふに水は、あつちをうた。あつちをうた。
りとあるする、あつちをうた。あつちをうた。
~~あつち~~霊のやうな他物めいをうた。あつちをうた。
眼をうた。あつちをうた。あつちをうた。
怪にさる眼の底に見すえをうた。あつちをうた。
か、い、何れなくあつちをうた。あつちをうた。
々、あつちをうた。あつちをうた。あつちをうた。
あちかは若草のうた。あつちをうた。あつちをうた。
い、あつちをうた。あつちをうた。あつちをうた。
い、あつちをうた。あつちをうた。あつちをうた。

入つて。人のゐるさぬ、狸か狐のやうな
 人物かそれ程へゝぬをかい、寧ろ、この節は
 そゝはぬ界にゑゑ、あつやは信甲しに。
 かつ、
 今昔話には、
 四村の好子のあふよ……
 つ
 むこゑゑ、すようでいひやす。好子
 好子、いと高き越え、
 一國征伐、お流めば、唐土
 までゆくと武蔵、おそゝゑゑ、大しとお氣遣ひで
 こゝにいひまゐり、かゝいゑゑ、あゑは、
 衆かゑゑ、たりやとぬ……
 あつやは微笑した。

[illegible]

[illegible][illegible]

香吉 加こよなく
愛慕して
あふみ草
木。ほろろく
草。桃
花。木。立
なご

雑化に運出せし。露岩利に見物させし。
 露岩利は足流のないうち。このサウな露岩
 いれに見えし。ところ。とん。と。猫に判。
 何より。利の増え。利手は利久に。ごぼい。あう。
 〇。足雑や。種を。にか。ましく。申し。あし。つ。何
 せ。れ。利久の。茶は。理書め。て。肩の。張。る。し。の。ん。
 二。ふ。り。や。の。の。露岩利は。そ。ろ。あり。そ。ろ。あり。何
 〇。れ。金。を。ま。ゝ。〇。他。の。れ。足。雑。れ。心。得。え。せ。ぬ。
 〇。二。の。サ。う。な。ゆ。い。し。よ。の。ある。情。品。より。れ。〇。そ
 の。へ。んの。茶。石。サ。サ。て。い。つ。い。つ。と。煮。ま。て。茶。

い前豆の火のやいふか……
 あちやは、此程の事の人間の声を聞く男
 の言葉が交へ入つた。
 あちかは、二の雪を利をのりよこしたこゝ
 んに利を……
 しを、雪を利のふれをうりぬ。知はう
 なやかぬふしがある……。あるは、雪を
 ずいひ、ぬくまはしいと思はぬ程なうな
 ー、ぬくまはしいと思はぬ程なうな
 小ぬりぬぬいかにえ？

雪を利は一矢報ひす小ぬきかして。雪をか
 きたかき……
 あ、ふれに利の不仕まかき、この世
 うな雪の愛い男が飛いぬしやした。これこ
 ん、へうにんかき。飛いぬしを以てな。
 命大に生きたるこゝろ。なまやみをおつた
 こぼり……
 あちやは、雪の自由になつた甲か口惜し
 いなほちうな。因人のやうな事なすかき。
 ついぬやかりに、身を許して、ううな甲か、

二、一、とせんといふ。大佛殿建立の急い所。
 (例) へ便者をとつた。徳善院が徳奉行になり。
 取寄をせよとて、多しいと云ふ。小の
 計画をとつた。かゝる。五人の社奉行は、三早
 つた。しかる。昔は、乐山に大佛殿建立の
 在り。利を先達させし。サレといふ。あ
 行り。つく。と。ふ。り。い。そ。小。を。是。物。か。た。か
 ところ。あ。う。た。か。ふ。り。北。野。松。原。に。近。々。大。築。の。計。り
 二、一、とせんといふ。大佛殿建立の急い所。
 (例) へ便者をとつた。徳善院が徳奉行になり。
 取寄をせよとて、多しいと云ふ。小の
 計画をとつた。かゝる。五人の社奉行は、三早
 つた。しかる。昔は、乐山に大佛殿建立の
 在り。利を先達させし。サレといふ。あ
 行り。つく。と。ふ。り。い。そ。小。を。是。物。か。た。か
 ところ。あ。う。た。か。ふ。り。北。野。松。原。に。近。々。大。築。の。計。り

[illegible]

水はひくすに流水雲は風に流す水とおうや
 す。何ゆゑに情無理なる若しは。人海に生かたゆ
 変かいたふやせぬ
 7
 あふは、そのやいゝ、只談笑かして柳ろ
 い。ゆゑにわが心、安んずるは道道とまゝに
 はなうぬ……
 ぬ、ゝゝゝと笑つて、あつやぬ久しおやに、
 この節あふい雪若利に懸きぬる。

7 女がある(書)か行けよしをい。見ていこ
 うなるさしとせ、女が持返書と持返る同様の
 一目散の太鼓へおどろいてしげいよせろ……
 四國征伐しあうかたは目録をつい、こ、の
 ころい、穀下は、女を人の瞳をぼくやをみ考
 へてしげいよ……
 雪路利がなつていり。返書お城に着いた
 か着かぬいかと思ふ。うすん。香吉大阪
 帰城のさしお水かはいつて来た。
 7 さうか、いらんあそおしよしんか……
 林 美 子

子 女のかとは怖ろしいにこいさし。殿下
 お帰へりとおかぬ。雪路利は寝たし、しき
 ませろ……。何やん殿下々々申しあがるつ
 しりていさし。お笑ひ下さいよすやうに
 子供か(お)いかう。来れよう。三は
 1-2 香吉はさうおとて城へ戻つて来た。お
 2 おおなり、誰の殿の言葉よし耳に流
 1-2 すてすてと 秋田の街へ行き、
 7 ちやちや！ ちやちが！
 と太鼓の音に……。

あ、ちやはに帳の陰にかくいてぬるか、朱な
は、うぐと、あ、ちかの涼しむるいね色の裾をぬ
ぬ、ちよこちよこを赤いみきうて、
の、い、並いぬる、あ、い、
抱、き、に、一、座敷の中を、こ、い、よ、と、う、う、な、

